

光遠院惠空講師

橋川正

本稿は野洲郡史下巻(第二十六章)に掲出したものに聊か補訂を加へ、課題の責をふさいでおく。はじめは全く新たに稿を起す豫定であつたが、種々の支障のため遂に餘裕がなくなつてこんな始末になつてしまつた。然し野洲郡史の播布と本誌とは範圍が異なることであり、幸ひ大谷派學事史研究の一篇にこれを加へることは、多少の便宜にもなることであらう。なほはじめに講師に對して敬稱敬語を省いたことをこゝわつておく。

金森の道西善從五代の子を善了といふ。善了の子を淨安といふが、淨安には空智、信空といふ二男子があつた。信空が即ち今こゝに述べようとする惠空の父である。龍玄から數へて惠空は畢竟八代の後裔である。惠空の傳記資料としてはその高弟惠曉の記した惠空老師行狀記を以て權威としなければならぬ。よつて主としてこの行狀記により、補添を試みつゝ叙べるこゝとする。

惠空姓は川那部氏、金森善龍寺(善從龍玄に因んだ寺號である、今は善立寺に作る)信空の子で、正保元年五月十五日夜子時に呱呱の聲を上げた。母を妙善尼といふ(寶永元年六月朔日歿)、信空と妙善尼との間には男子六人、女子三人があつた。惠空は齡未だ志學に至らざる頃家兄に別れ愁情の餘り、迹を他郷に隠して儉かに出で、遠行せむとし、既にして糧を貯へた。父はその志あることを

聞いて制止して許さなかつたが、願心已まず終に十八歳の時父に言ふやうには、比叡山は五宗の章疏を函藏せる靈山であるから、願はくは彼に登つて學びたいと。信空はその心の繋ぐべからざるを知つてこれを許した。かくして山に登つて研鑽すること三年に及んだ。惠空が幼少の時から好學の人であつたことは十七歳の時に寫した山雲海月集一冊が善立寺に傳へられるのでも知られる。その卷末に自ら

萬治三歲霜月十一日初夜寫記之畢

江州金森桑門 善立寺之慧空叟

と記す。なほその翌年に寫した傳教大師の作といはれる末法燈明記一冊(善立寺藏)、十七條憲法・下學集合一冊(大谷大學藏)がある。前者の卷末には

蝙蝠比丘惠空一十有八寫焉哉

と記し、後者の終には

于時萬治四 辛午稔華朝二十三日寫之畢

江州野洲郡金森善立寺之惠空

とある。義空(惠空の甥、聞空の子)はその傍に「我師空公十七歲之御筆也、義空子」と記入して居るが、十七歳は全く十八歳の誤りである。末法燈明記を寫したのは登山前であるか後であるか明か

公開Web版図

光遠院講師十八歳筆末法燈明記奥書

(近江金叡寺立守藏)

でないが、恐らく比叡山に登つて觸目した所を直ちに寫了したのではなからうか燈明記は親鸞聖人が教行信證文類中に引載する所であるが、他日惠空によつて築きあげられた眞宗學が何等かの形でこの時代から胚胎して居たことは、注意を要する事柄である。

然し惠空は熟ら己れの立場を考へ善龍寺が眞宗の靈場として蓮如上人以來法燈盛然として傳はれることを思ひ、比叡山を辭去して、祖風を景慕し湖東の龍溪(安

心領解問答抄の著者)と共に研究した。後京都に出て誓源寺の圓智に隨つた。この頃惠空は或る時は大津にあつて斗籤し、或る時は京都高倉に在つて學功を積んだ。圓智は一宗の耆老であつて、本願寺の琢如上人も最も厚く圓智を遇した。一日圓智が琢如上人にいつていはく、惠空は是れ宗門の英才である、希くは經祿を給ひ學に安んせしめよと。これによつて寛文十年二月の頃(時に二十七

歲) 召し出されて給仕した。上人も殊の外惠空を眷顧した。

寛文十一年十月、堂に於て法譚を許可された。それより已來衆人擧つて教を稟けた。或る時十七條の疑問を記して諸方の學生に釋解を求めたが、應答するもの一二はあつたけれども未だその本意を得なかつたから、自ら答釋した、昔問解がこれである。或ひは又宗門の人をして身口意三業の煩ひ無きことを知らしめむがために領解等の三部を製して親族に示した。

後門弟の請によつて京都西福寺(上京區押小路通釜座西入)に入つた。時に延寶八年十二月十二年三十七であつた。こゝに於て講筵を開けば會集する者夥しく、命を受けて諸國に到れば歸伏する者復少くなかつた。然し惠空は決して名利榮華を望まず出堂を辭したいと乞ふたが、聽されずして數年を経た。時に金澤の養壽院といふ者があつたが、上洛して本願寺の坊官粟津大進に惠空の學を保護すべきことを説きその苦役を許されむことを願つた。かくして遂に天和三年閏五月朔日、四十歳にして出仕を免せられた。よつてこの年の秋のころ閑窓に於て大藏經を周覽し筆記してその要を集めた。諸經論釋は乏しくないが、淨土教に關する典籍は未だ悉くこれ得ず、曾て柵尾の經藏は、明惠上人(高辨)已來集める所の秘匱と聞くから、就いて一覽せむと欲し、大いに苦心の結果數年にして所志の如く開くを得た。即ちこれを見れば淨土部といふ銘のある櫃のみあつてその書籍は多く闕け、纔かに三五を得て歎息するの外はなかつた。嵯峨の二尊院は淨土宗本山義の本寺で、古典の

あることを聞き玄誓と共に行つて、請ふこと三年、その本意を遂げて入藏して法然上人の漢語燈錄や西山義關係の秘書若干卷を見ることが出来た。當時和語燈錄は知られて居たが漢語燈錄は全く忘れられて居た。惠空がこれ宿習の因緣なりとて落涙抑へ難かつたといふのもさこそと思はれる。

惠空は淨土宗鎮西派の學匠義山良照と親交があつた。漢語燈錄は世に知る者が少いが、これを世に及ぼしては如何と或る時惠空は義山に語つた。義山はこれを快諾した。その後義山が又一本を得て校訂して出版したのが所謂義山本の漢語燈錄である。けれども本文批判の上から見て惠空の傳へた所謂真本の正しいことは現今の學界に於ては等しく認められて居る所である。なほ義山との關係を物語る好箇の史料が善立寺に傳へられて居る。それは善導の觀經疏に出て居る二河白道譬喩の畫幅で義山はその畫に親鸞聖人の「善導大師證ヲユヒ」といふ和讃一首を讚文に供へて居る。裏書は惠空の自筆で

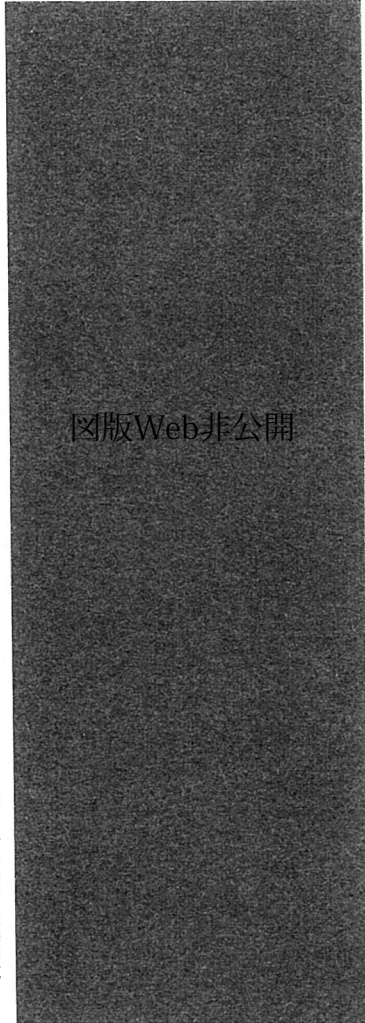
贊井銘 鎮家隱侶義山子筆

二河白道繪圖 命畫工使寫私之所思者也

元祿二己巳孟冬二十六日 釋 惠空子

ごある。

元祿四年二月晦日、父信空は七十五歳で示寂した。惠空は走つて金森に歸り火葬收骨して京都に



二河白道繪裏書（光遠院諱師筆蹟）

（近江金嶽善立寺藏）

贊とは親鸞聖人の和讃「善導大師證ヲコヒ」一首で、それを義山が認めてゐるのが珍らしい。

還つたが、出塵の志愈々切なるものがあつて、翌年七月（年四十九）、西福寺を出て幽栖を卜した。猪熊や御幸町に居を占めたのはこの頃である。同十六年三月十九日、妙幻といふ一子を失つた。恩愛別離の情禁じ難く、讀經念佛の裡に目を送り、新たに彌陀尺餘の立像を刻んで中に三經七祖聖典の要文並びに信空妙幻の遺骨を納めた。自ら得岸と號したのはこの時からである。

寶永四年、河内大信寺（中河内郡八尾町にある大谷派の別院）に赴いて往生論註を講じ、同五年の頃、大坂今橋の平野屋五兵衛（高木氏、後剃髮して宗賢といふ）がしきりに請ふ所あり、同六年四月

十五日天滿本泉寺(今北河内郡甲可村葎屋にある本泉寺か)に於て選擇集を開蒔し、引續いて同七年正徳元年、同三年、四年、五年に同處に於て淨土三部經三帖和讃、善導の具疏及び玄義分序分義を講演した。開蒔毎に聽衆千二百に及び、信士信女の席に列する者數を知らずといふ盛況を呈した。惠空はただこれ祖師の香薫の然らしむる所といつて、己れの足らぬところを恥づるばかりであつた。善立寺に傳はる大經要義の卷末に斯記六冊草篇由來とて左の如き語を記入する。

寶永六年十一月天滿本泉寺大坂光徳寺ヲ首トシテ僧十七人並平野屋五兵衛大坂今橋一同シテ三部經講

談ヲ請ヘリ、遂ニ承諾シテ其臘月ヨリ斯内錄助講ヲ始筆ス、翌ル七年庚寅四月十五日大經開題、

於本泉寺本堂拜談、三方ニ構結シ上ニ蓋覆アリ、堂ノ中央ニ高座シテ拜談ス、大信寺殿八尾深廣院

殿眞宗寺殿院家ヲ首トシテ都合八百餘席ノ牌アリ其名帳別ニアリ、半鐘三下シテ大衆每座ス、休日數在

テ同六月十四日大經講竟ヌ、講蒔四十二座ニ滿畢、翌ル十五日ヨリ阿彌陀經開講ス、此日記之

彌陀經助講
ハ義要也

隱 侶 惠 空
七十
七歳

右此六卷講談聽聞之暇、於天滿寫レ之者也、寶永七年夏 所化理寬所持

その盛況彷彿として眼前に見るが如くである。

正徳五年十月十五日、眞如上人は竊かに惠空を召して講演を請ふた。よつて黙し難く惠空は先づ開口に述べるやうは、毎年の報恩講に影堂に於て大衆改悔の出言があつて各々自己の領解を述べる

が、今愚の述べる所も全く講論ではない。今日は幸に大經和讃の上に於て愚が領解を申すのであつて、意宛もかの講筵に擬し、詞の俚きは生得の過である。同二十一日、上人は再び惠空を召し自今以後寮内の緇林を汝に預け遣はすと告げ、爵祿を給した。惠雲はなほも固辭することが出來ず寮衆の訓育に當ることゝなつた。學寮は當時涉成園(枳殼邸)内にあつたのであつて、寛文五年筑紫太宰府觀世音寺の學寮をこゝに移して繼承したと傳へる。即ち一派宗學を攻究する教育機關であつて實に惠空を以て初代の講師とするのである。

翌享保元年四月十五日(七十三歳)、初めて寮衆のために大無量壽經を講じた。義空はこの時の有様を記して「緇林尤茂、不_レ異_三于竹葦_一」といつて居る。同四年宗主より安陀衣を拜領した。同年四月大坂の難波別院(南御堂)に於て阿彌陀經を開演した。秋八月には天滿の本泉寺で文類聚鈔を講じた。同六年は本泉寺の前住宗賢の七廻忌に相當するので、當住はその報恩のために前年講じ殘された善導の定善義散善義の講演を依頼したから、四月中旬本泉寺で右二帖疏を講じた。八月からは近江長濱に於て三帖和讃を講じはじめ、十月二日に滿了した。この時門弟に語つていはく「予講今以爲終矣」と。十月五日京都に歸つたが、同下旬の比から聊か微疾の氣であつた。同二十八日、宗主から記録篇集の事を命せられた。病中であつたが、速かに事を終へ記成つて晦日自ら持つて行つた。それより疾漸く重く醫療も効を奏しなかつた。惠空は多くの訪問者に向つて次の面謁を期せずと告

げるのであつた。手に念珠を持つて稱名斷ゆることなく、毎朝語つて曰ふには、毎夜學友と共に討論すること未だ絶たず、學問の情如何がなす、嗚呼憂なる哉と、終生學事に專念したことが知られる。十二月七日の朝から食事を斷ち藥湯を用ひず、口にかつて世事を語らず、頭北面西にして身手を動かさず、たゞ念佛を唱へるばかりであつた。翌八日の晡時に至つて、眠るが如く絶息した。時に春秋七十有八。法號を光遠院と稱す、嗣子あり名を惠春といふ。

義空傳寫の惠空老師行狀記(袋綴、墨附十二葉)は善立寺に傳へられるがその卷末識語は左の如くである。

于_レ斯貧道去元祿庚辰(十三年)出_二古郷_一至_二京師_一明辛巳之春頃、初謁_二此師_一、今迄_二于辛丑歲_一(享保六年)、經_二於二十一年_一、蒙_二厥厚恩_一、取_レ喻以無物、以_レ何擬_二報恩_一、嗚呼想_二昔顏容_一、如_レ有_二今尙目前_一、念_二說法聲_一、音々而如_レ觸_二耳_一、仰瞻無_二夫面貌_一、伏惟又無_二其音_一、是爲_レ夢將_レ幻、思夫泪連々不_レ止也、凡平生在_二師前_一、親以_レ有_二見聞所_一、今又與_レ誰俱語矣、故得_二中陰之節_一、聊記_二彼行狀_一而以爲_レ捧_二尊靈前_一、豈不_レ晚焉、酬_二師恩_一哉、然今所_レ誌、唯所_二以恐_一後廢忘_一也云爾、于_レ時享保七年次壬寅春正月廿二日、劣弟惠曉謹而修_二小祥齋_一、揮淚書_二於京兆東_一而已

明和三 丙戌臘月六日書寫訖

義 空 恩 常

行狀記が惠空寂後一ヶ月餘にして製作された事は右によつて明かであるが、編者惠曉は越中鷹栖

正安寺に生れ、後京都西蓮寺に轉住した惠空の高弟である(寂年並びに世壽缺く)。なほ南條文雄氏の編纂に係る大谷派講者列傳碑文集(眞宗全書所收)の慧空講師傳は江村秀山氏の草する所であるが全くこの行狀記を假名交り文に改めて削修したものに過ぎないから、別に參照する點は殆んどない。次に惠空の編纂著述としては

無量壽經開義六

觀無量壽經叢林解六

阿彌陀經聞記一 (眞宗大系所收)

假名聖教目錄一 (同)

本願寺實錄四

第十八願成就文宗要文一 (刊)

言南無者宗要文一 (刊)

觀經愚聞記 (惠空講、西秋記)

阿彌陀經誌辨一

觀經四帖疏叢林解十一

選擇集聞記七 (享保四年刊)

同義述八 (惠空講、西秋記)

正念佛偈私考一

作業持勸抄二 (刊)

淨土疑問解一 (刊、眞宗全書所收)

小僧指南集一

小僧物語集一

鎮勸用心述意抄一 (刊)

集古雜篇一 (眞宗全書所收)

貴迹大略一 (同)

淨土釋疑集二 (刊、同)

教行信證御自釋一 (刊)

異執決疑編二（眞宗全書所收）

安心決定抄翼註三（刊、眞宗全書所收）

御文歡喜鈔一（明治三十年刊）

叢林集（刊、眞宗全書所收）

阿彌陀因行記二（刊、眞宗全書所收）

他力領解抄二（刊）

選擇集叢林記八、科二（眞宗全書所收）

正念佛偈文林一（同）

文類聚鈔講錄二

三帖和讚報恩抄六

三帖和讚略註二（正德十一年刊）

阿彌陀經義要四（元祿十五年刊）

論註叢林誌六、科一

序分義抄一

法事讚叢林一

淨土眞宗血脈論一（同）

同驗略一

淨土文類聚鈔叢林解六

不退義記二（刊）

讚佛慈悲集三（刊）

專修專念抄二（刊）

正念佛偈略述一（同）

三帖和讚科本四

同略記一

三帖和讚解五

御傳繪視聽記五（刊、開爲六卷、眞宗大系所收）

三部經分科四

玄義分抄五、科一

定善義抄三

往生禮讚偈叢林一

觀念法門叢林鈔一 (眞宗大系所收)

般舟讚叢林一

愚禿鈔聞書一

淨土和讚二十一首註一

淨土眞宗指歸一

眞宗安心消息一 (刊)

眞宗要論雜記一

眞宗譬喻章一 (刊)

説聽要文一

新造阿彌陀佛形象記一

御影像記一

御葬禮實錄集一

攝州野田村御書考一

第十七十八十九二十之四願釋一

念聲是一聞書一 (眞宗大系總目錄參照)

右の如く著書は六十部以上に上るが、眞宗學の基礎を築くについて如何に偉大な功績を有するかは改めていふを俟たぬ。しかもその學風たるや穩健堅實であつて、單に抽象的な原理の研究のみに没頭せず、眞宗の由つて來りし變遷沿革を考へ故實を重んじたことは最も出色の點といはねばならぬ、その學解の廣汎なりしことは現に善立寺に傳へる書籍目錄によつて明かであつて、漢籍圖書をひろく網羅し、中には阿蘭陀南蠻秘傳寫本一卷、阿蘭陀名藥集一卷の如き西洋醫藥に關するもの迄も含んで居る。書籍を愛尙するの餘り傳藏について如何に苦心したかは、左の書籍目錄に徴するこゝとが出来る。但し今傳はるものは義空の筆に係るがやうである。

江州野洲郡金祿善龍寺書籍目錄并序

夫當處^ハ者昔^ハ、則東行之驛路^ニ、而台嶺^ノ之風通^ニ於衢^ニ、今^ハ、則西往^ノ之道場^ニ、而大谷之流^レ、霑^ス於宅^ニ、嘉禎^ノ年歸^メ、眞宗^ニ以降^ニ、二百餘回之後、蓮如上人殊^ニ、蘭^ニ、此^ノ地^ヲ來還年累^ニ、門葉日^ニ盛^{ナリ}、此^ノ時^ノ、歷代傳寫之書^ノ上人製作之記[、]雖^レ多^シ所持^ニ、坐^ニ信長公之亂^ニ、悉散失^シ焉[、]爾^リ來^タ、纔^ニ所^レ傳者[、]復誤^レ火^ヲ燒亡矣[、]嗟呼[、]舊基忘^レ處[、]籍典[、]无^レ可^レ見[、]宗門遠名^ノ之故地[、]湖東榮利之勝迹[、]何^ソ其然^{ルヤ}也[、]豈亦不^レ悲^{キニ}乎[、]以^レ是住持僧[、]聞空願建^ニ一庫[、]藏^レ書[、]期^ニ永^ナ予[、]是其類屬[、]何不^レ喜^ニ之耶[、]於^レ此[、]自所持^ノ之書物盡^レ卷^ヲ、寄附奉納^シ、以爲^ニ續^テ資^ニ、法命^一與^ニ之彼^ノ本[、]纂襍^ノ而隨^レ類定^レ、爾^リ永^ク使^レ爲^ニ當寺所持^ノ者也[、]若於^ニ住持職之人[、]不^ニ一々^ニ披見[、]則應^レ爲^ニ下埋^ニ、法身^ノ之輩[、]右奉納^ノ之興趣[、]亦有^ニ其^ノ由[、]一^ニ此^ノ地[、]火難^カ故[、]京^ハ此^ノ難^多亦我[、]稀^カ寺^ニ無^ニ文庫^一故[、]二^ニ此^ノ地[、]虫咀^フ少^カ故[、]京^ハ此^ノ怖^シ多^シ故[、]三^ニ此^ノ處[、]學侶稍集^テ恒^ニ玩^レ書故[、]不^レ爾[、]四^ニ此^ノ處[、]宗旨舊歷之名跡[、]由緣有緣之地[、]故[、]我^ハ寺^ハ不^レ爾[、]五^ニ此^ノ地[、]近邊^ニ書籍甚^ダ希也[、]京都^ハ、遍覽自在[、]故^ニ以^ニ此^ノ等^ノ所由[、]納^ニ之[、]當寺^ニ畢[、]我^ハ西福寺之後々[、]孫弟等努^レ不^レ可^レ爲^レ、諍^テ也[、]今^ハ此^ノ庫中錄內之典[、]一帙一卷[、]不^レ可^ニ他出[、]縱令^ヒ兄弟雖^レ多[、]曾^テ不^レ可^ニ分配[、]讓與[、]若令^ニ散失[、]紛闕^一則可^レ爲^ニ旨[、]无窮之法眼[、]削^ニ弘利之根元[、]上^レ於^レ然者法尉[、]在^ニ二世[、]亦可^レ謂^ニ佛敵^ト乎[、]若又於^ニ寺屬門類^ノ之厚志[、]有^ニ潜見隱寫^ノ之者[、]堅^ク限^ニ約^ノ期日[、]而選^テ應^レ許^ノ之歟[、]又若有^ニ步來^レ於^レ此[、]欲^レ見^ノ之輩[、]雖^ニ是^レ他人^ノ制^ノ之外也[、]後昆宜^ク知^レ之願望[、]濟々焉[、]法水遠沾洋々乎[、]法命永久[、]曰^レ爾

維時元祿五 壬申年秋九月廿一日誌之

寄主 京師西福寺 惠 空 染筆

元祿五年といふと父信空を失ふた翌年で幽棲の志深かりし當時、藏書を故郷金森に施入したのである。現在藏書は大分散佚して居るが、善立寺及び大谷大學に藏するものを合すればその大部分を形作ると思はれる。去る大正十三年三月十六日、善立寺に於て惠空の二百年忌法要を營み關係書籍の記念展觀を行ひその遺芳を偲んだが、今日に至るまで金森に毎春講釋會が開催されて道俗ともに聽聞にいそしみ法悦に涵り得るのも全くその故郷に残つた感化のたまものといふべきである。

編著に關してせめて書史學的解題をしたいつもりであつたが、時日切迫のため今回は斷念しなければならなかつた。他日を待つて補ふこととする。